

寫生の方法とその價值

黒田清輝

在來の日本畫にも寫生と云ふとはあるが日本畫の寫生法は歐洲にて普通に行はれて居るのとは大にその趣を異にして居る。

在來の日本畫の寫生法は、例へば椿の花を寫し取るとすれば、花を折つて來て花生けにするとか、又は手に執ツて善く見るとかする。而して之を寫すに就ては、その花か、右に傾ぐとか、左に曲るとか、その實物の格好の如何を問はず、之を寫して、その繪が兎も角も實物らしく出來れば、それで宜しいのである、所が西洋式の寫し方は、寫す人が座つて居るか、立つて居るか、何れにしても、その位置より花を見たそのまゝを畫くのである。向ふの花が光線に照らされた工合や、又自分と花との距離の關係、高低の有樣等を善く見るのである、此方法によつて、その形を寫したる正確な習慣を付けるとが必要である。さうして、モデルとなつて居る實物と比較して、一分一厘も違はぬ様に寫されて居るや否やを吟味して、寸分も違はないやうに注意すべきである。故に嚴密な、而かも巧妙な寫生を爲すには、實物をうかと見た位では駄目である。右に云つた様に位置光線等の工合を精細に吟味すべきである。

故に寫生の要點は、實物を精密に見る習慣を養ふにあるが、その習慣を養ふには、如何にすべきかと云ふに、先初めの中はモデルを選ぶことに注意を要する。繪を畫く力の程度に應じたるモデルを選択せずに、力不相應のも

のを寫さうとすれば、必ずや視力を纏め得ない結果、寫生の習慣は得られない。故に初學の者には石膏の物體が最も適當である、石膏は一色であるから光線に上つて生ずる凸凹の工合が明瞭^{はつき}り分り易く、又物體の形狀即ち三角であるとか、四角であるとか、或はその輪廓の現はれる様子が知り易い、反^{これにはんして}之、例へば極く簡単な花活けの如きも必ず多少の色が着いて居れば、形もまた種々である。之が一步進んで人の顔面になれば一層困難となる。即ち顔だけでも色々な色がある、或は赤味を帶びた所、或は光線の爲めに妙に光る所、痣もあり、髭もあると云ふ譯で、種々に錯雜し、色々に變化して居る。故に畫く場合に色の爲めに欺されることが多い、例へば普通の色では、一部分が光線を受ける明るい所にあるとか、高い場所とかにあれば、白くするのが當然であるのに、若し其處に痣があるとすれば、黒くしなくてはならん、故に若し顔半分が癍であつたとすれば、其高低の關係は如何に寫すか、之が素人には、黒い色の處が、高い所であることを示す様に畫き現はすとは極めて困難である。されば初學者には石膏の眞白な一色のものを畫いて、先づそれより筆力を操り、習慣を養ふのが最も適當である。即ち石膏に依つて形容の工合や、光線より生ずる影日向の關係を、判然と畫き寫し得る様になつて後に、生きたる人間の顔を寫すが順序である。

嚴格に人の顔を寫すには、必ず鼻より目までの距離であるとか、耳の形とか、鼻の高さ等の點に就て十分専門的知識がなくてはならん。即ち解剖學に熟達して居て、内部の骨の構造等に關して研究した後、始めて人の外部の形を完全に畫き取ることが出来るものである。日本畫風に、唯だ人間の形のみを畫いて置けば、それで人間となつて居ると云ふ様な、簡単な譯のものではない。人と人との相違の點や、特長を畫き分くるには、十分なる解

剖學の素養がなくてはならん。

然し畫家と云へば、言ふ迄もなく、如何に巧妙であつても、寫生のみでは足りるものではない。寫生は畫家に要する一つの方法であり、又畫家となるものゝ學ぶべき一つの技術であるが、出來上つた畫は、何んでも寫生風でなくてはならんと云ふ様に考へて居ては間違である。或場合には純然たる寫生風であつては面白味がなく、又目的に副はぬとがある。それは技術家の腕に依るものである。要するに寫生は畫の根本であり、畫家となるに就ての根據であると云ふのである。

『文章世界』二十三年三月